



堀辰雄
(明治三十七〜昭和二十
八)

ほりたつお
堀辰雄

かせた
「風立ちぬ」

それらの夏の日々、一面に薄の生い茂った草原の中で、お前が立ったまま熱心に絵を描いていると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たえていたものだった。そうして夕方になって、お前が仕事をすませわたし
て私のそばに来ると、それからしばらく私達は肩に手をかけ合ったまま遥か彼方の、縁だけ茜色を帯びた入道雲のむくむくした塊りに覆われている地平線の方を眺めやつていたものだった。ようやく暮れようとしてく
かけているその地平線から、反対に何物かが生れて来つつあるかのように
……

そんな日の或る午後、(それはもう秋近い日だった)私達はお前の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、その白樺の木蔭に寝そべって果物を齧じっていた。砂のような雲が空をさらさらと流れていた。そのとき不意に、どこ
何処からともなく風が立った。私達の頭の上では、木の葉の間からちらつと覗いている藍色が伸びたり縮んだりした。それと殆んど同時に、草むらの中に何かがぼつたりと倒れる物音を私達は耳にした。それは私達がそこに置きっぱなしにしてあった絵が、画架と共に、倒れた音らしかった。すぐ立ち上って行こうとするお前を、私は、いまの一瞬の何物をも失うまいとするかのように無理に引き留めて、私のそばから離さないでいた。お前は私のするがままにさせていた。

かせた
風立ちぬ、いざ生きめやも。

④フランスの詩人ヴァレリーの詩の一節(風が立った。さあ、生きていこうか)

ふと口を衝いて出て来たそんな詩句を、私は私に靠れているお前の肩に手をかけながら、口の裡で繰り返していた。それからやつとお前は私を振りほどいて立ち上って行った。まだよく乾いてはいなかったカンヴァスは、その間に、一めんに草の葉をこびつかせてしまっていた。それを再び画架に立て直し、パレット・ナイフでそんな草の葉を除りにくそうにしなから、

「まあ! こんなところを、もしお父様にでも見つかったら……」

お前は私の方をふり向いて、なんだか曖昧な微笑をした。

「風立ちぬ」は昭和十一年から十三年に発表された小説で、日本は二・二六事件を経て、戦争へと突き進んでいた時代である。発表から三年後には、日本軍はアメリカと戦争状態に入る。いわば戦争と言論統制の時代であった。

けれども、不思議なこと
にこの作品には、そうした時代の影は欠片も見られない。
主人公は作家で、婚約者の節子は結核を患っている、症状は重い。(主人公も軽微ながら罹患している)二人は、八ヶ岳山麓のサナトリウムで共同生活を営むが、すべては死の色合いに染められている。「私」は、「皆がもう行き止まりだと思っているところから始まっているようなこの生の愉しさ、おれ達だけのものを形に置き換えた」として、自分たちの在り方を小説にしたいと言
い、節子も同意する。

小説は五つの章に分かれたれ、最後は、「死のかげの谷」と題された、節子の死んだ後の追憶場面となっている。

自ら結核に侵されていた堀は、死に至ることを必然的に宿命づけられた人間の目から見た小世界を描き切ることで、社会や世の中の動き、戦争の足音に怯える人間などから遮断された内面の場所に、特有の時間と空間を生み出すことに成功している。堀は、この内閉した心象世界を構築するによって、逆に世界の惨禍に耐えようとしたのかも知れない。

堀は自分の人生観を「挿話的・散歩的」と呼ぶ。正面切って深刻に構えるのではなく、苦痛に満ちた世界を如何に快適にするか、そこに人生の深みがあるというのである。

その透明な悲哀に満ちた知的な文体は、それだけで文学の価値を再認識させてくれるものがある。